

高等学校における「体育理論」に関する研究

ー内容と構造に着目してー

スポーツ文化研究領域

5010A063-1 野間基子

研究指導教員：友添 秀則 教授

【本研究の背景と目的】

高等学校学習指導要領が、2009年に改訂され、科目体育では、「体育理論」の指導内容の整理、精選が図られ、授業時間数が明示された。これは体育における「知識」の重要性が見直されたことによるものである。しかし学習指導要領に常に必修として位置付けられてきたにもかかわらず、「体育理論」の授業実践は芳しいものではなかった。そこで、本研究ではこれまでの体育理論の内容と取り扱いの変遷を踏まえ、改訂された「体育理論」の内容と構造について批判的に検討したうえで、よりよい「体育理論」の授業実践に向けた新たな内容と構造を提案することを目的とする。

【各章の概容】

第1章

第1章では、「体育理論」の内容や構造の検討に向けて、これまでの「体育理論」についての問題点を抽出することを目的としている。

そこで、学習指導要領に示された体育の目標と「体育理論」の内容および取り扱いについて、生活体育の時期、技能重視・体力主義の時期、楽しい体育の3つの時期に区分してその変遷をみた。そこでは、体育の目標が時代の要求に反映して変化してきたこと、またその体育の目標に対応して「体育理論」の内容や取り扱いが変化してきたことがわかった。

また、体育雑誌に寄せられた論考の内容や本数の変化は、1970年代までは学習指導要領の

告示の時期やその扱われ方の軽重の影響が大きかったことが分かった。

また1980年代以降は、「体育の存在意義」が問われる中、「体育理論」についても身体的、技能的、文化・歴史的側面等、さまざまな側面からその必要性が示されていたことが分かった。

その結果、「体育理論」の価値や存在意義を十分に示すことができなかった要因として、

①体育の目標の変化に応じて「体育理論」の内容が大きく変化してしまったこと。

②研究者がそれぞれの立場によって、多方面から必要性が示されていたが、「体育理論」として何を学ばせるのかという視点での研究が十分にされてこなかった現状があること。

以上の2点が明らかになった。

第2章

第2章では、「体育理論」を含む体育における理論学習の意義とその役割を明確にすることを試みた。

体育の教科内容領域として、ここでは身体学習、技術学習、認識学習、社会学習、情意学習の5つに整理し、これらの学習には技能と知識が存在することを明らかにした。

また体育は運動領域と理論領域から構成されていることから、それぞれの領域において理論学習を行う必要があることを述べた。

次に、理論領域で学ぶべき内容として現代スポーツの諸課題について取り扱った。課題としては、ドーピング問題、スポーツと商業主義、

スポーツと政治とのかかわりを取り上げ、理論学習の必要性を確認した。

また、その際の学習では単に知識を習得するだけでなく、仲間や教師と意見交換をしながら倫理的視点で考えることが効果的であることを示した。

最後に生涯スポーツを継続する視点から、スポーツに関するリテラシー学習の必要性を述べた。ここでは、友添(2001)が示した「スポーツ文化を学習する4つの学びの次元」を参考に、特に高校期における学習の内容や方法を検討した。あわせて、授業内に学習で獲得した活用する場面とスポーツ環境を創造するための実践的学習の場を設ける必要があることを示した。

第3章

第3章では、2009年改訂の「体育理論」の批判的検討を行った。

まず、運動に関する領域で扱うことが効果的な「知識」についての検討を行った。対象は、学習指導要領の「体育理論」に示された「2 運動やスポーツの効果的な学習の仕方」の内容と運動に関する領域で示された知識の内容である。

ここでは、運動に関する領域の各単元のなかで扱うことが効果的な「知識」と「理論」が存在することがわかった。また、「理論」については単元内で適宜、座学で取り扱うことを提案した。

次に、「体育理論」の「1 スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」と「3 豊かなスポーツライフの設計」について批判的検討を行い、その後でスポーツに関するリテラシーの育成についての効果的な学習について検討した。

その結果、「1 スポーツの歴史、文化的特性や現代スポーツの特徴」では、高09要領で示された指導内容を理解したうえで、現代スポー

ツの課題に対し倫理的研究の視点に立った学習の必要性を示した。

また、「3 豊かなスポーツライフの設計の仕方」では、示された指導内容に加え、高校期における学校内外のスポーツ機会や施設の活用についての学習、我が国のスポーツ基本法や諸外国のスポーツに関する施策の学習の必要性について述べた。

スポーツに関するリテラシーの育成の学習では、現代スポーツの課題を倫理的研究の視点に立って思考する機会の確保や科目保健や教科公民との連携の必要性や総合的な学習の時間の活用及び、学校行事や運動部活動を活用した主体的な運動・スポーツの実践の機会を設けて行うことが効果的であると考えた。

結章

本研究のまとめとして次の4点を提案した。

- ①高等学校の体育で取り扱う理論学習の内容として「スポーツ概論」と「体育理論」を位置づけること。
- ②「スポーツ概論」では、スポーツ文化固有の内容と生涯スポーツ設計に関わる内容で構成し、各学年にまとまった時間を確保し座学で学習すること。
- ③「体育理論」では、運動に関する領域で必要な知識を体系的に捉えて、ある程度のまとまりにして、座学で取り扱うこと。
- ④運動に関する領域では、「体育理論」と別に、運動・スポーツの実践に必要な個別の「知識」についても取り扱うこと。

上記の提案をもとに、高09要領で示された体育の単元数、体育理論の授業時数を踏まえ、学年ごとに、運動に関する領域で扱う「体育理論」と理論領域であつかう「スポーツ概論」の内容を示した。